

## 53. 湖北地方出土の墨書土器



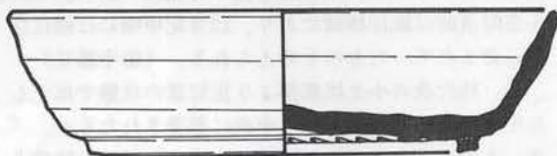
- 1 十里町遺跡    2 高田遺跡    3 五村遺跡  
4 柏原遺跡    5 井口遺跡

湖北地方において、これまで、墨書土器が出土したということがほとんど報じられていなかったが、ここ1、2年の間で、4遺跡から6点の出土を見ている。墨書土器は、遺跡の性格の一端を示す貴重な資料であり、報告書刊行に先立って以下に紹介する次第である。

### 1. 長浜市十里町遺跡八ノ坪地区

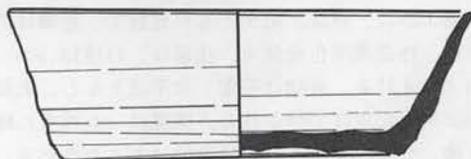
十里町遺跡は、標高約88mの低湿地に立地し、縄文時代晩期及び弥生時代前期の遺物を堆積する自然水路、奈良～平安時代の縦横に穿たれた小水路、土壇群が検出されているが、墨書土器はこの小水路及び土壇から出土している。

(a) 小水路から出土した須恵器の高台付杯身で、胎土、焼成ともに良好で、色調は暗灰色を呈する。口径14.5cm、器高4.0cmを計る。高台は、底部と体部との境界



伊香郷

I-a



寺

I-b



より隔たらない位置に付き、短く、ほぼ垂直に接地する。外面底部と体部との境界付近は強いナデ付けかへラ削りを施している。体部はほぼ直線的にのび、口縁先端部は丸くおさめている。平城宮跡SK820、219に相当すると思われ、8世紀中頃～後半の中頃に比定できる。

墨書は、外底面のほぼ中央にあり、「伊香郷」あるいは「伊香厨」とも読める。「伊香郷」の場合、当然伊香郡八郷のうちの伊香郷のことを指すと解してよからう。現在の木之本町大音あるいは高月町井口付近ともいわれる。伊香郷の地名は、承平年中(931～937)の成立とされる「和名類聚抄」巻七の伊香郡中に「伊香古」とあるのが初見である。(宮成良佐)

「伊香厨」と読む場合、鴨御祖大神宮申状案(「平

安遺文」第4巻、1287号)に「堅田御厨」とあり、源頼朝下文案(「平安遺文」第8巻、4155号)に「安曇河御厨」とあること等から「御厨」が私領の一種で広い意味の荘園を指すことが明らかである。従って、「伊香厨」と読む場合、伊香領を指しているものと考えられる。伊香郡には弘福寺領である伊香庄の存在したことが延久二年(1070)三月八日の近江国弘福寺領莊田注文や同年十月弘福寺三綱解等に見え、土器の示す年代より若干下るが、伊香庄を指す可能性が強い。なお、十里町遺跡は細江郷域にあり、12世紀中頃には細江庄域に含まれていたものと考えられる。(田中勝弘)

(b) 柱穴状の小土壇底部より正位置の状態出土した平底杯身の外底面のほぼ中央に墨書されたもの。「寺」と読める。本遺跡の遺構は古代寺院関連の施設とは認め難いが、本遺跡の北東約1.2kmの位置に寛平七(895)年開基の寺伝を有する神照寺が存在する。この寺院は、地割りによって2町四方の寺域が復元でき、条里制施行以前の建立であることが認められる。また、神照寺は三百坊と伝えられ、その僧坊の範囲がこの付近にまで及んでいたと伝えられる。また、本遺跡の北北東約0.7km付近に、環状溝式の心礎を有し、白鳳期の古瓦が出土したことを伝える新庄馬場廃寺があるが、いずれかに関連するものであろうか。

墨書土器は、焼成、胎土ともに良好で、色調は内面暗灰色、外面黒灰色を呈す。法量は、口径12.5cm、器高4.0cmを計る。底部は安定した平底をなし、底部と体部は明瞭な角度で分かれる。体部は一旦内方に彎曲した後、やや外反する。口縁端部は丸くおさめる。平城宮跡S D485、S K820に相当し、8世紀前半頃のものと思われる。

(c) 耕土中より出土した高台付杯身底部外面の周縁部に「イ」の一字が認められるものである。漢字の偏の部分であろうか。

土器は、焼成、胎土ともに良好で、色調は白灰色を呈する。高台は、体部と底部との境界のすぐ内側に、短く、垂直に接地する。(宮成良佐)

## 2. 長浜市高田遺跡(電々公社敷地内)

標高87m付近の低湿地に立地する遺跡で、古墳時代前・中期を中心とする遺物を堆積する自然水路の埋土中より出土したものである。土器は平底杯身で、その外底面の中央よりやや周縁寄りに墨書が認められる。「家」と読める一字の上に「小」かと思われるもう一字が認められる。土器の焼成、胎土はともに良好で、色調は暗灰色を呈する。法量は、口径12.0cm、器高3.8cmを計る。底部は丸味をおび、底部と体部との境目はややあまい。体部は直線的に外上方へのび、口縁先端は丸くおさめている。藤原京跡Ib、陶邑T K46に相当し、7世紀後半のものと思われる。(宮成良佐)



## 3. 虎姫町五村遺跡

五村遺跡は、標高95mの低湿地に立地する遺跡で、湖北地方では長浜市大東遺跡に次いで二例目である平地に立地する方形周溝墓を検出した。墨書土器は、広範囲に広がる沼沢状の堆積土中より、弥生時代以降の遺物とともに出土している。墨書土器は須恵器の杯形品の外底面に墨書したもので、「一」と「八」を縦に並べて書かれている。数字だと思われるが、「一」の字に墨点かみられ、「一」となり、あるいは別字であるかもしれないが、上下の間隔から2字になることには間違いないものと考えられる。(田中勝弘)

#### 4. 高月町柏原遺跡

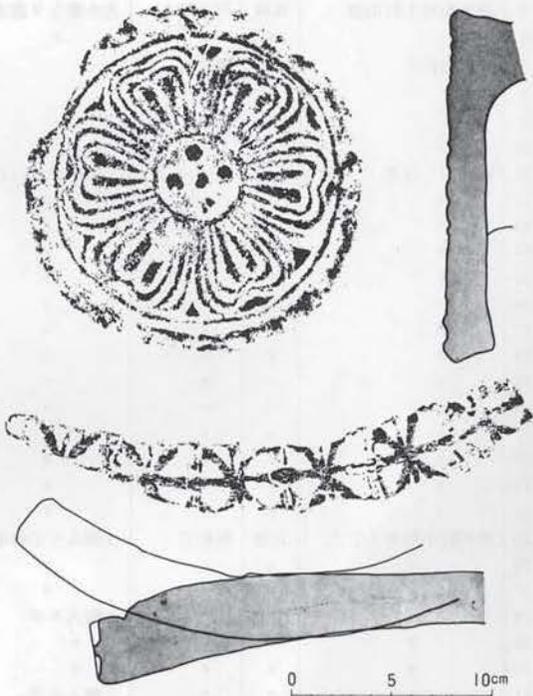
柏原遺跡は、伊香郡高月町柏原に所在する。東方に高時川が南流し、遺跡は、それが形成する自然堤防上の微高地に立地する。これまでの調査で、古墳時代後期から平安時代後期にかけての竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡等を検出している。ここで紹介する墨書土器はビットナンバー94の比較的大型の土壇より出土したものである。灰釉陶器の皿形品。口径13.2cm、器高2.9cmと小ぶりで、口縁端部を外反させ、外方に踏んばった小さな高台が付く。およそ11世紀頃のものと思われ、当遺跡内では最も新しい時期に属する。この時期の明確な遺構としては井戸跡のみであるが、遺跡の所在する地域が「和名類聚抄」に見る柏原郷に比定でき、郷が古墳時代後期にさかのぼることが判明

できたとともに、平安時代後期にまで存続していたことが知れる。

さて、墨書は、灰釉陶器の皿形品の外底面に見られ、「今西」と判読することができる。「今西」は、東浅井郡湖北町に今西として地名に見られる。湖北町今西は、長寛二年(1164)七月某日の奥付のある陽明文庫所蔵兵範記、仁安二年秋卷裏文書に「近江国浅井西郡今西庄大番舎人等陳申云々」に初見する「今西庄」域に含まれるものとされている。墨書土器の「今西」はこの「今西庄」の「今西」を指すものと考えられる。「今西」は東浅井郡の朝日郷域に入る。一方柏原遺跡は伊香郡の柏原郷域に所在するのであり、先述の十里町遺跡から「伊香郷(厨か?)」の墨書土器が出土したことに類似した関係を示している。(田中勝弘)

### 54. 高月町井口遺跡 出土の古瓦

井口遺跡(位置図-5)については、ほ場整備工事や国道365号線バイパス工事等に伴う事前調査によって、南北約1.1km、東西約500mの範囲に及び、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴式住居跡群、掘立柱建物群等が検出されている。また、最近、室町時代頃かと思われる墓地跡が発見され、多様な様相を呈する遺跡であることが判明している。当遺跡は、東海地方と日本海地方とを結ぶ古代よりの幹道である北国脇往還道(国道365号線)に沿い、また、遺跡東側には条理制遺構を残す水田が開けており、古代交通上の要所を占め、広大な生産基盤を持っており、古代村落の発展、展開を解明していくのに貴重な資料を提供するものである。この古代村落内に、氏寺的な要素を持つのではないと思われる寺院跡が存在したであろうことは、昭和51年度に実施した試掘調査により、小字殿町付近で、瓦溜りが検出されたことで推察された。寺院跡に直接関連する遺構については、現在実施している国道365号線バイパス工事に伴う発掘調査によっても発見されていないが、今回のこの調査によって、軒瓦の新しい資料を得たのでここで紹介しておきたいと思う。なお、これまでに出土しているものは、軒丸瓦2種類、軒平瓦1種類で、『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ-Ⅱ』(滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会、1977年)や『近江の古瓦Ⅱ湖西、湖北』(財団法人滋賀県文化財保護協会『文化財教室シリーズ』16)等に紹介されているので参照されたい。今回の出土地点は、小字殿町の南隣で小字小安と宿ノ西の3小字が接する付近の旧河道からの出土である。1点は軒丸瓦で、複弁6葉。外区に一重の圏線をめぐ



井口遺跡出土瓦

らせ、外縁との間には連珠が認められない。中房は一重の圏線と1+4の珠文を配する。内区の花弁は肉薄で、子葉の外側に3重線で花弁を表している。もう1点は軒平瓦で、平瓦を軒瓦に転用したもののようで、 $\lambda$ 形の施文を7回連続させている。施文はタタキ板を使用しているらしく、接続部が重複したり、また、おさえて整形している。

この2点の軒平・軒丸瓦の他に、すでに出土している重孤文軒平瓦と単弁八葉軒丸瓦も同じ旧河道から出土しているが、共伴する須恵器等土器類に年代的な幅があり、必ずしも同時代のものとは仕難い。湖北地方

では、保延寺海道・尾上・弓削満願寺・八島廃寺・大東・不動谷・高溝・枝折・磯遺跡等10遺跡から古瓦の出土を見ているが、現在のところ、この2点と同型のものは見られない。ただ、系統的には、弓削満願寺出土の軒丸瓦に同様のものがある。満願寺のものは、外縁に2重の圈線をめぐらせ、花卉は子葉を2重の線で取りまいて表現している。中房も異なる。また、軒平瓦では、施文ではないが、保延寺海道遺跡出土の

もので、平瓦の端面に2重弧を施し、下端に粘土を新たに貼り付け、指で押圧して波状にしたものがあり、本来的なアゴを持たない点に類似点を見出せるものがある。満願寺・海道両遺跡出土のものは、およそ奈良時代頃のものと思われるが、井口遺跡出土のこれらの2点も、それに近い時期のものではないだろうか。

(田中勝弘)

## 55. <特集> 近江出土の銅鐸

番号	出土地点	地形	出土年	出土状況	総高(㎝)	鈕	鐸身文様	参考文献	備考	
1	大津市滋賀里(崇福寺)	山麓	天智天皇7	崇福寺建立中	(167)	(突線か)		①⑦	『扶桑略記』	
2	大津市石山(石山寺)		天平		(150)				『石山寺縁起』	
3	大津市石山寺辺		文化3		(90.9)	突線	六区突線文帯	①④⑦⑧⑩	石山寺蔵	
4	草津市志那町	湖中	昭和7	砂利採掘中	12.6	扁平	四区袈裟禪文	②④⑧	津田頼成蔵	
5	蒲生郡竜王町山面	丘陵	明治23	大小重なり出土	30.5	扁平	六区 "	①④⑧	東博蔵	
6	"	"	"	"	21.5	"	四区 "		"	
7	守山市新庄		寛政11		43.0		流水文(横帯二区)	③⑧⑩	5個同范(重文)	
8	"		"						不明	
9	"		"							
10	"		"						不明	
11	野洲町小篠原	丘陵	明治14	土壇中より(14個)	134.5	突線	六区袈裟禪文	①④⑩		東博蔵
12	"	"	"	"	75.7	"	" " (水鳥2羽)			"
13	"	"	"	"	70.0	"	" "			"
14	"	"	"	"	"	"	" "			"
15	"	"	"	"	68.0	"	" "			"
16	"	"	"	"	63.5	"	" "			"
17	"	"	"	"	"	"	" "			"
18	"	"	"	"	62.5	"	" "			"
19	"	"	"	"	60.5	"	" "			"
20	"	"	"	"	56.5	"	" "			"
21	"	"	"	"	50.5	"	" "			"
22	"	"	"	"	50.0	"	" "			"
23	"	"	"	"	46.0	"	" "			"
24	"	"	"	"	31.0	扁平	四区袈裟禪文		"	
25	野洲町小篠原大岩山	丘陵	昭和37	3個入り子(10個)	46.0	突線	六区袈裟禪文	⑤⑧⑩	県教委	
26	"	"	"	"	47.2	"	" "		"	
27	"	"	"	"	47.5	"	" "		"	
28	"	"	"	3個入り子	53.8	"	" "		"	
29	"	"	"	"	55.2	"	" "		"	
30	"	"	"	"	57.5	"	" "		"	
31	"	"	"	3個入り子	68.5	"	" "		"	
32	"	"	"	"	78.5	"	" "		"	
33	"	"	"	"	80.6	"	" "		"	
34	"	"	"	"	54.2	"	流水文(横帯)		"	

### 参考文献

①梅原末治『銅鐸の研究』昭和2年。②梅原末治「近江発見の小銅鐸」人類学雑誌50-10昭和10年。③梅原末治「一群の同范鑄造鐸の絵画について」上代文化24昭和29年。④世界考古学大系2「日本II」昭和35年。⑤水野正好「滋賀県野洲郡野洲町小篠原銅鐸埋藏遺跡調査概要」日本考古学協会昭和37年度大会研究発表要旨昭和37年。⑥日本原始美術4昭和39年。⑦藤森栄一「銅鐸」昭和39年。⑧杉原荘介「日本青銅器の研究」

昭和47年。⑨三木文雄「銅鐸」日本の美術9昭和48年。⑩「大陸文化と青銅器」古代史発掘5昭和49年。⑪西田弘「石山寺蔵重要文化財銅鐸の出土地について」滋賀文化財だより15昭和53年。その他⑫鎌木義昌「祭祀と信仰」日本の考古学III昭和41年。⑬田中琢「まつりからまつりごとへ」古代の日本5昭和45年。⑭中口裕「銅の考古学」考古学選書4昭和47年。以上近江出土の銅鐸を記載する主な文献を列記した。(葛野泰樹)